

相加・相乗平均の対数を用いた証明

定理 1 n 変数の相加・相乗平均の関係

n 個の正の数 x_1, x_2, \dots, x_n について

$$\underbrace{\frac{x_1 + x_2 + \dots + x_n}{n}}_{\text{相加平均}} \geq \underbrace{\sqrt[n]{x_1 \cdot x_2 \cdot \dots \cdot x_n}}_{\text{相乗平均}}$$

ここで、等号が成り立つのは $x_1 = x_2 = \dots = x_n$ のときに限る

注 1

相加平均 a は、 $\underbrace{a + a + \dots + a}_{n \text{ 個}} = x_1 + x_2 + \dots + x_n$ を満たす数である。

相乗平均 g は、 $\underbrace{g \cdot g \cdot \dots \cdot g}_{n \text{ 個}} = x_1 \cdot x_2 \cdot \dots \cdot x_n$ を満たす数である。

証明 自然対数 $\log x$ は単調増加だから、

$$\log \frac{x_1 + x_2 + \dots + x_n}{n} \geq \log \sqrt[n]{x_1 \cdot x_2 \cdot \dots \cdot x_n}$$

すなわち

$$\log \frac{x_1 + x_2 + \dots + x_n}{n} \geq \frac{\log x_1 + \log x_2 + \dots + \log x_n}{n}$$

を示せばよい。

$$X = \frac{x_1 + x_2 + \dots + x_n}{n}$$

$$Y = \frac{\log x_1 + \log x_2 + \dots + \log x_n}{n}$$

とおく。

n 個の点 $P_1(x_1, \log x_1), P_2(x_2, \log x_2), \dots, P_n(x_n, \log x_n)$ の重心 G が (X, Y) である。

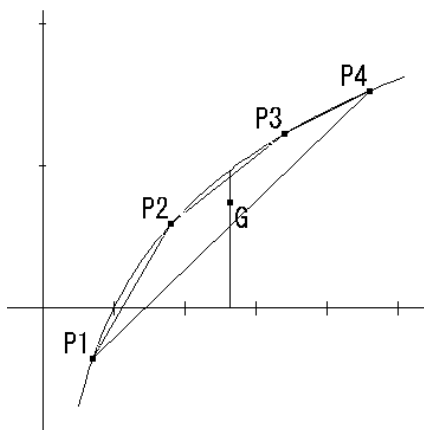
$C: y = \log x$ は上に凸であるから、 G は C より下方にある。

$$\log X \geq Y$$

すなわち

$$\log \frac{x_1 + x_2 + \dots + x_n}{n} \geq \frac{\log x_1 + \log x_2 + \dots + \log x_n}{n}$$

等号が成り立つ、すなわち G が C 上に乗るのは、すべての P_k が一致する $x_1 = x_2 = \dots = x_n$ のときに限る。



この証明を見ると、単純な平均 $\frac{x_1 + x_2 + \cdots + x_n}{n}$ に限らず、加重平均 $\frac{a_1x_1 + a_2x_2 + \cdots + a_nx_n}{a_1 + a_2 + \cdots + a_n}$ でも成り立つことがわかる。

定理 2 n 変数の相加・相乗平均の関係の拡張

n 個の正の数 x_1, x_2, \dots, x_n と和が 1 の n 個の正の数 $\alpha_1, \alpha_2, \dots, \alpha_n$ について

$$\alpha_1x_1 + \alpha_2x_2 + \cdots + \alpha_nx_n \geq x_1^{\alpha_1}x_2^{\alpha_2} \cdots x_n^{\alpha_n}$$

ここで、等号が成り立つのは $x_1 = x_2 = \cdots = x_n$ のときに限る